

国立民族学博物館の収蔵品 ⑥0

ルーマニアのガラス・イコン



H0211537 (悲しみの聖母)

東欧諸国で主流となっている東方正教会をカトリックやプロテスタントなどから際立たせる特徴はイコン崇敬である。イコンは、もともとギリシア語で「像」を意味したが、今日では「礼拝用板絵」を意味することが多い。正教会では偶像崇拜の禁止という原則から立体的な彫像が否定されるので、カトリックのようなイエス像やマリア像は用いられない。偶像崇拜禁止は、キリスト教が生まれたユダヤ教の「モーセの十戒」のなかで最も重要な規則であり、初期キリスト教において

も同様であった。

しかし、キリスト教会では聖者の聖遺体・遺物を祭壇の下におさめる習慣が生じ、これなしには正式の教会ではないと考えられたことも影響して四世紀中ごろから東方ではイコン崇敬が始まった。その基本的考えによると、感覚的なものは超感覚的なものを認識するために必要であり、イコンは単なるモノではなく、これを通して神そのものを崇拜する手段であるという。キリスト自身、神的なものが人間の肉体となつてこの世に現れたものであり、目に見えない神がイエスという人の形をとることによってみずからを証したという受肉と同じ考えである。

そのため、イコンは聖なるものであるから写実的であつてはならない、あるいは自然的なものに制約されてはならないという描き方の規則がある。さらにイコンは客観的に眺め觀賞するものではないので、描かれた人物は真正面をむき、それを見る人はイコンのなかに参与するものとされる。聖なる姿の居並ぶ超自然的空間で、自分もまたそれに連なり、神、キリスト、聖母、聖人たちと対話すると考えられるのである。

それに対して、ルーマニアのガラス・イコンでは比較的自由なモチーフを描くことができるために、民衆の素朴なレベルで理解された信仰が単純な構図によって表現される。また修道士に限らず農民などの世俗の間によつても製作されたり、巡礼を行った信者が記念に持ち帰る記念用として販売されたりしたために、巡礼地を中心にして発達したという歴史がある。

ガラス・イコンの製作においては、まずガラスの裏面に墨で線引きのトレースを行う。ガラスの表から線を見ると正常に見えるように、トレースする裏側からはその線が鏡に映したような逆書きに描く。次にトレースされたものに色を塗っていくが、最初に色を塗るのは「図柄」の部分にあたるところで、その後「地」の部分に色を塗っていく。製造技術が未熟な時代につくられたガラスの表面には凹凸があるが、この技術的制約がかえって光の反射を複雑にし、鑑賞するには味わいを増すことになった。

(新免 光比呂)